〔研究ノート〕

卒業論文にみる日本語表現の適切性について
――中国・A大学日本語科の事例――

王　　崗

要　旨

日本語科が設置されている中国のほとんどの大学において，四年次に学生には卒業論文が課せられている。日本語による論文執筆なので，多かれ少なかれ不自然な日本語表現が出てくるのは特に不思議ではない。ただ，四年次生の日本語レベルから考えると，卒業論文に基礎段階での誤用が多いのは重視されるべきことである。例えば，「～たら」や「ちょっと」など会話に使われるべき表現，あるいは「～を育つ」のような文法的誤用などが，日本語専攻の学生たちの卒業論文にみられる。本稿は，具体的にどのような日本語表現に問題があるのか，また，なぜそのような表現が使われているかについて考察する。

キーワード：卒業論文，日本語表現の問題，誤用，教育指導，中国語の転移

1．はじめに

作文の実践と指導は，日本語教育の重要な一環として，日本ではもちろん，中国の大学の日本語科でも重要視されている。これに伴い，学習者にどのように指導すれば流暢で自然な日本語の文章が書けるようになるかという研究や実践活動も続けられている（齋藤シゲミ2005，田中信之2005など）。そして，作文教育にみられる問題点は何であるか，どのように取り組めば問題改善ができるのかということも，内外ともに関心の高いテーマになる（熊燕2010，李晨媚2012など）。

比較的活気にあふれた作文の教育と研究に比べ，学習者による卒業論文に関する研究は，どちらかといえば，まだかなり不足しているようである。日本でも中国でも，確かに卒業論文やレポートの書き方に関わる著書が多数出版されているが，そのほとんどが論文のテーマ選び，構成，文献の引用方法，書式体裁などに集中する（例えば，于康2008，戈登・哈维2007など）。日本語の表現など語学面

での注意事項や問題点を取り扱うものは，筆者の知っている限りでは，浜田麻里ほか（1997），二通信子・佐藤不二子（2003）以外にほとんどみられない。

文章構成や文献引用の方法などは，卒業論文の完成度を高めるためには必要不可欠な要素になるわけであるが，日本語の表現など言語運用の基礎部分が無視されてはならない。いくら構成が完璧であっても，あちこちに不自然な日本語が出てきては好論文だとはいえない。

日本にいる学習者たちは，日々日本語を使うため，卒業論文やレポートなどを書く際に文章法などに注目すればいい場合が多い。また，周りに日本語母語話者も多いので，いざというときに助けてもらうことが可能になる。これと対照的に，中国にいる学習者の多くは，日本語を常時使用できる環境に置かれていないため，文章法のみならず，日本語の運用に頭を使わなければならない。そのうえ，日常生活で日本語話者に接するチャンスや経験がほぼゼロに近い学習者にとって，困ったときに周りに聞く人がいないのが現実である。

中国の大学の日本語教育現場では，作文の指導は確かになされているが，卒業論文に関する指導は，めったに行われていないように思われる。卒業論文の書き方や書式体裁などは，学習者が基本的に指導教員のマンツーマンの指導のもとで学習しながらマスターする。この過程は，指導教員の個人的好みに影響されることが多い。論文の主題に厳しい教員もいれば，書式または表現に厳しい教員もいる。このため，卒業論文の全体的完成度においては，事実，ばらつきがみられる。

しかし，そういうばらつきの分析は，本稿の関心要項ではない。本稿では，もっぱら卒業論文に発見される日本語の基礎的表現問題に注目し，中国の日本語教育現場ではまだ何が足りないのかについて検討する。

2．調査の対象と資料

調査の対象は，2009年～2012年当時に中国のＡ大学に在籍していた，中国語を母語とする日本語専攻の４年次学生である。調査資料は，その学生たちが提出した計17本の卒業論文である。これらの資料は，筆者が研究目的で許可を得てコピーしたものであり，選別は一切していない。

中国のＡ大学の場合では，卒業論文の構想から提出まで，およそ半年間の研究と指導期間が設けられているが，日本語力の差に加え，研究方法の不案内などで，学生たちが提出した論文の初稿ないし二稿，三稿まではかなり粗末なものが多く，読んでもわからない部分が多い。三稿以降になって，はじめて卒業論文としての形や構成が整っているということである。

こういう事情があるため，指導教員としては，卒業論文のところどころに目を配らなければならなくなり，かなりの労力と精力が払われることが調査でわかってきた。その結果，際立った誤りのみに修正を促したり，論文の構成や書式に気を取られたりする教員が多くなるのである[1)]。このためか，卒業論文の最終原稿においても，日本語の表現が見逃されてしまい，結果的にさまざまな不適切な表現が現れることになるのである。

以下，その日本語表現の問題点を取り上げるが，それは，「は」・「が」やテンス・アスペクトなどかなり難しい部分ではなく，基本的に基礎的な部分に集中する。具体的には，３で卒業論文に現れる不適切な文体的表現，４で文法的表現について考察する。

３．卒業論文に現れる不適切な文体的表現

3.1.「～から」の使用

原因・理由を表す「～から」と「～ので」については，これまで非常に多くの研究が行われてきている（鈴木忍1978，森田良行1988，赵福泉1988，グループ・ジャマシイ2001，泉原省二2007など）。その主な使い分けもおおよそ明らかになっている。つまり，「～から」は主観的表現で，文末の命令，提案などの形式と一緒に使用可能であり，「～ので」は客観的表現で，因果関係が明らかな事実である文に使われるということであろう。しかし，論文やレポートに使われる「～から」と「～ので」については，これまでは，浜田麻里ほか（1997）以外にめったに言及されていないようである。

論文で「～から」を使うのか，それとも「～ので」を使うのかは，日本語話者にとって恐らく自明のことであろうが，学習者になるとそうではない場合がある。参考文献が少ないことに加え，教育現場で適切な指導がなされていないため，以下のような間違いが卒業論文に出てきたのである。（文章理解のためには，以下の引用例に筆者の手で若干の調整が加えてある。調整後の文字はイタリック体で示す。なお，各例の文末にある「Ａ１」のような記号は，卒業論文のランダム番号を示している）。

（１）　確かに，日本の漢字は中国から伝わったものである*から*，当然中国語との繋がりが深い。（Ａ１）

（２）　運動の伝承はその国の文化との調和がなしには考えられない*から*，もしただ単純にゴルフというスポーツを移入すると，よい発展ができないのである。（Ａ９）

（3） ただ十年ほどの間にM７．０を超えた地震が多かったから，日本に起こってしまった地震数は数えきれないに違いない。（A 11）

上述の例にある「～から」は，それぞれの文脈では不自然な用法で，「～ので」や「～ため」のように置き換えられるべきであろう。

論説文には，基本的に「～ので」や「～ため」が多用されるが，「～から」が用いられることもある。ただ，それが，理由節はどうしてそのような結論になるのかという根拠を述べるという場合に限られる（浜田麻里ほか1997参照）。むろん，この場合でも，「～ので」「～ため」も使用可能であると考えられる。

3.2.「～たら」の使用

日本語の「～たら」，「～ば」，「～と」，「～なら」という条件表現は，それらの区別が難しいので，日本語を習得するうえで最難関項目の一つとされる。このため，それらを使い分ける研究や分析は，今日でも続けられている（于日平・黄文明2004，泉原省二2007など）。しかし，これまでは，会話などの口語的表現に限っての使い分けが議論されてきたので，どのような文章体に使用可能か，そしてどういう違いがあるかという検討や言及は，まだあまりなされていない。実際，論文という固い文体において，上記四形式の使い分けは口語ほど難しくないように思われる。その一つに，「～たら」が使えないということがまずあげられる。

が，A大学での卒業論文をみると，「～ば」「～と」「～なら」のほかに「～たら」が入り混じって使用されるケースがかなり目立つ。以下に例をあげよう。

（4） 単語の用法が知らなかったら，誤用をもたらす。（A 1）

（5） 彼女たちの生と死は一旦曲馬の舞台に上がったら，一層密接になる。（A 8）

（6） 一つの桜の花がとにかく，一本の桜の木でも，一人ぼっちでさびしい気がする。しかし，広々とした桜の森としたら，本当に美しくて壮観である。（A 10）

（7） 今の日本ゴルフ場の利用税は最高1200円で人民元にしたらただ80元ぐらいである。（A 9）

日常会話，特にくだけた会話には，「～ば」「～と」「～なら」に比べ，「～たら」の使用率が比較的高いと思われる。この傾向は，中国における学生たちの日本語運用にも反映されている。その結果，学生たちは，無意識のうちに，普段使い慣れている「～たら」を各自の卒業論文に使ってしまったのではないかと思われる。

3.3.「だ」体と「体言止め」の使用

文末の表現と文体の関連性について，池尾スミ（1987）はかつて整理したが，それを次のように引用する。

表 1　文末表現と文体

	書きことばの文体	話しことばの文体
口語常体	である体	だ体
口語敬体	であります体	です体，ございます体

（池尾スミ 1987：16）

表 1 から明らかなことに，書きことばの文体は，基本的に「である」体がふさわしい。とはいえ，「だ」体および「体言止め」は新聞，雑誌などにみられるし，くだけた会話で使う「だ」体はまた小説や日記にも使える。この意味で，それら二つの文末形式は，絶対に文章に使えないかというと，必ずしもそうではないといえる。しかし，卒業論文のような比較的固い文章体においては，基本的に「体言止め」は使えないだろう。また，「だ」体より「である」体が使われることが一般的である。このような文体の制限は，中国にいる学習者の一部では，まだマスターしきれていない。その結果，卒業論文には次のような問題が生じているのである。

（8）　しかしながら，日本語には「分配」というのは英単語の「distribution」の翻訳なので，「配給」，「分配」という意味があるだが，現代中国語の「分配」と違ったところがある。「安排，分派人員」という意味がないからだ。（A 1）

（9）　このような「尊敬語形式」に問題がないのだが，相手に聞かれたくないと思っている内容を直接尋ねているとの点に問題がある。（A 12）

（10）　中国では，このように，様々な体験活動を科目に導入すべきだ。（A 13）

（11）　というのは，機械工具商人の安田辰郎が某省の汚職事件の被疑者としての佐山憲一と女中の時子が「偽装」情死した当夜，香椎湾に居合わせたという確実な線を指すこと。そして，現実には佐山と時とは何の関係もなく，ばらばらな二人であることは二つの点を表す。（A 17）

（8），（9），（10）には「だ」体が用いられ，（11）には「体言止め」の形式が用いられるが，全体的にみれば，本稿で収集した卒業論文に「体言止め」が使用

されたのは，A 17の学習者のみである。それは，「だ」体に比べ，「体言止め」の形式が中国の学生の間でまだなじみ薄いもので，使用者が少ないからではないかと考えられる。また，（8）の「意味があるだが」からわかるように，中国の一部の学生は，「だ」体にこだわり過ぎたためか，用言に「だが」（形容詞の例に「よいだが」がある）をつけたケースも目につく。

3.4. 敬語の使用

そもそも卒業論文は，「謝辞」を述べる部分など特別な場面以外に，基本的に敬語の使用とは縁遠いが，中国の学生は，次の通りにそのような表現問題を産出している。

(12) また，時代の発展とともにホームレス問題についての最新資料はインターネットにより発表されることが多いので，それも参考させていただくことになった。（A 5）

(13) 上にも触れたように，川端は祖父と十年に近く二人で暮らした。目と耳とも不自由のお祖父と過ごした時間の大多数は無言であった。（A 8）

(14) 中国は日本の革新精神を勉強してください。将来中国なりのゴルフ文化を期待する。（A 9）

(15) このような状況の中において，松本清張及びその『点と線』は，日本の国民にとって，どのような存在であるか，専門的な評価をここに引用させてもらう。（A 17）

敬語のほかに，「お祝い」や「お酒」などの美化語も，卒業論文に発見されている。このような問題がなぜ発生しているかについては，学生たちが日常の口語的表現慣習に影響されることが唯一考えられる要因であろう。卒業論文は，あくまでも冷静に，論理的に書くべきである。そして，論文では読者にもある程度の心構えをもって読むことが要求されるので，あまりへりくだったり媚びたりする必要はない。こういうことを卒業論文作成時に学生に指導すれば，以上の誤用を避けられるだろうと考えられる。

3.5. 他の口語的表現

上述のほかに，中国の大学生の卒業論文にはまだ多くの口語的表現が頻用されている。それらをすべて取り上げればキリがないため，比較的典型の例と思われるのを拾ってみたい。

(16) これはジョバンニにとってはちょっとわけの分からない行動であるが，

実はこのことから，カムパネルラの不安が反映されたと思える。（A 6）

(17) これらの協会はほぼ置物みたいに実際な効用があまり見られない…（A 9）

(18) 私はこのことに大きな興味を持っている。（A 10）

(19) だから，中国の小学生は「減負」のおかげで，日本の小学生のように勉強意欲が下がるという悪い影響がないのではないだろうか。（A 13）

(20) また，漢字言葉で表現できない言葉では，いっそ漢字で新しい言葉を作るようにしていた。（A 16）

(21) 日本の国民たちは，小説，ドラマ，映画，アニメ，甚だしくは探偵という職業の合法化などの様々な形式を通して，日本の推理文化を内から外へとずんずんと影響を及ばすようにしている。（A 17）

(16) の「ちょっと」は日ごろの会話でよく使われていて，中国の学生にもなじみの表現である。これが原因なのか，学生の中にはそれを愛用している向きがみられる。しかし，卒業論文には，それを「少し」などのような文章語的表現に置き換えなければならない。

(20)，(21) にある「いっそ」と「ずんずん（と）」は，その意味範囲や使用頻度などからの制約で，本稿の調査でそれぞれ1例しか見つかっていないが，(17) の「みたい（に）」，(18) の「私」，(19) の「おかげで」はいずれも卒業論文でよく目にするものである。

「私」は，中国語話者だけではなく，日本語話者も論文に使うことがある。言わば，比較的普遍的不適切表現のケースであろう。論文に使われる「私」について，奥秋義信（1993）は，「「私」があまり出過ぎる文章は，幼稚な内容と取られやすい。」（p.334）と指摘しているが，卒業論文のような固い文体において，たとえ出すぎではなくても「私」を使うと論文全体の格下げが生じる。そうならないためには「筆者」や「本稿」のように表現するほうが妥当であろう。(19) の「おかげで」については，これを単なる原因・理由の表現として使う学生がいるが，受益の意などとして使う学生もいる。いずれの場合においても，卒業論文には合わない言い方であろう。かわりに「～で」や「～ため」など意味合いが中性的な表現を用いるほうがいいと思われる。

上記のほかに，卒業論文には，「せいで」「深々と」「でも」「すごく」など数多くの口語的表現もみられる。

3.6. 文体的誤用の生起要因

ここまでは，中国の大学生による卒業論文にみられる文体的誤用のケースを中心に考察してきたが，以下にその誤用生起の要因についてまとめる。

3.6.1. 中国語からの負の転移

中国語には文体の差がないわけではない。例えば「対了」（場合によっては日本語の「ところで」の意として使われる）という表現は，論説文ではもちろん，普通の文章でも使いにくい。ただし，その差は，日本語ほどはっきりしていないことが多い。例えば，「～から」と「～ので」，「～たら」と「～ば」，「ちょっと」と「すこし」，「みたいだ」と「ようだ」などは，そのような区別自体が中国語にはない。まして，文体上の使い分けはなおさらである。一方，「だ」体と「体言止め」という形式になると，そもそも中国語にはない。

このように，中国語には日本語の，例えば「～から」と「～ので」などのような使い分けがないため，学習者はその微妙な文体的差をとらえるための勉強をしなければならない。その教育や参考書が不足している状況にあっては，各人の内省にしか頼れない。その過程で中国語の負の転移を受けがちである。その結果，前掲のような文体的誤りが生じるのだろう。

3.6.2. 教育指導の不足

中国の学生が文体的誤用をするのは，教育現場での指導が十分になされていないことが，大きな要因として考えられる。

前の節でも触れておいたように，中国語にはない日本語の特徴的表現に対して，学習者は勉強を通してしか捉えられないことが多い。その過程では，教育現場での指導や教授が非常に重要な働きを果たす。それが十分でないと，学生たちは往々にして，個人の日常的表現慣習や母語に影響されながら，自分勝手に問題対応するほか術がない。それが結局，前掲のような誤りを生み出してしまうことになるのである。

いくら単純な誤りであっても，学生たちに適切な指導がなされない限りは，卒業論文から根本的にはなくならないだろう。同じような問題点は，毎年繰り返されるばかりである。従って，今後の日本語教育では，具体的に学生にどのように指導すべきか，そしてどのようにすれば有効な改善策を打ち出せるかが重大かつ現実的な課題になる。

3.6.3. 日本語からの逆影響

全体的にいえば，現代中国語においては，敬語がそれほど発達していない。従って，中国語を母語とする学習者は，中国語からの転移で，日本語の敬語を習得しにくいし，もともとそれに親しみを感じていない傾向がみられる。しかし，卒業論文になると，なぜ敬語が頻繁に使用されるのだろうか。それは恐らく学習者が日本語からの逆影響を受けている可能性が高いからだろう。日本語の勉強を通して身につけている敬語表現は，それに対応する中国語がないだけに，逆に特に意識して使おうとする学習者がいる。そういう普段の敬語運用の慣習に引きずられるためか，卒業論文に「～てください」や「～ていただく」のような言い方を使ってしまうのではないかと思われる。

4．卒業論文に現れる不適切な文法的表現

日本語学習者の書いたものに文法的誤用があることは，さほど驚くべきことではない。本稿で収集した卒業論文にも，文法的誤用がいたるところに発見されている。中には，「は」・「が」やテンス・アスペクトなど難関項目のものがあるが，動詞の自他表現など比較的単純なものもみられる。以下に，誤用要因の分析を交えながら，後者の誤用例を中心に検討する。

4.1. 動詞の自他に関わるもの

動詞の自他という文法範疇においては，日本語と中国語が対応している部分がある。例えば，「食べる」と「吃」，「読む」と「看」は日中両言語のいずれでも他動詞とされており，「生活する」と「生活」，「渇く」と「渴」はいずれも自動詞である。このような動詞類に限っていえば，中国語話者にとって特に理解が困難ではないし，基本的に間違いにくいのである。しかし，次のように自他の対応をする動詞になると，誤用が起きやすい。

(22) 第三は，作品の内容とその表現形式が必ず一致している。芸術の本質が表現で始め，表現で終わるから，独特な芸術創意を重視するべきである。（A 3）

(23) ここから，ジョバンニはとくに自分がどこから汽車に乗ったことについて分からなかったということが明らかにした。（A 6）

(24) 両団体はずっとツアーの環境を整備し，国際交流の責任をになったし，ツアープレーヤーのレベルアップを図るとともに，世界で勝てるプロを育って，及びにジュニアの育成を自分の使命とするのである。（A 9）

(25) …平成17（2005）年から6年間で累積赤字を続いていることがわかる。（A 14）

「始める」と「始まる」，「明らかにする」と「明らかになる」はそれぞれペアをなす動詞または動詞的表現である。学生は前者を自動詞と捉えた結果，(22) と (23) の誤りを犯してしまったのである。一方，「育つ」と「育てる」，「続く」と「続ける」の各ペアについては，学生がそれぞれ前者を他動詞と思い込んだため，(24) と (25) の誤りを引き起こしたのである。

中国語の動詞の自他は，主に文中の位置によって使い分けられ，日本語のように語形で区分されることがない。例えば，「开」という動詞は「开门」のように言えば「開ける」の意味で他動詞になり，「门开了」のようになれば「開く」の意味で自動詞になる。つまり，同じ形で他動詞であったり自動詞であったりするということである。このような違いがあるため，中国語を母語とする学習者は，自動詞と他動詞のペアをもつ日本語の動詞に対してうまく把握できない場合がある。たとえある程度把握できたとしても，ペアをもつ大量の動詞群は，どれが自動詞，どれが他動詞という区分の規則が分からない状態では，いざ用いると前掲例のように混同してしまうこともよくある。

一方，次にみられるように，自動詞と他動詞のペアに関係ない，比較的単純な誤用例も多い。

(26) この作品が発表して以来，世に大きな影響を与え，日本の読者に新しい文学スタイルをもたらす。（A 2）

(27) 禅学色深い兵法書にも，各部分も「無思想」の思想を見える。（A 4）

(28) 『古事記』に，「木花咲耶姫」という神を記してある。（A 10）

(29) 小学生たちは運動意識が強くなく，体の健康にとても重視していないことを示しているのではないか。（A 13）

(30) 以上の調査から，一人っ子は非一人っ子よりよい生活条件や教育条件がもっているが，家族皆から一身に愛情を受けて育つため，家事する経験も乏しい，精神的にも弱いことがわかる。（A 14）

(26) の前半部分は，中国語でいうと「这部作品发表以来……」のようになり，中の「发表」は，自動詞とされるべきか他動詞とされるべきかの判断が難しいように思われる[2)]が，そのどちらの場合でも，「作品发表」の言い方が成り立っており，「作品被发表」（「被」が中国語受身表現の動作主マーカーである）という受身的言い方が (26) の文脈では成り立たない。当該の学生は，恐らくそういう中国語的表現法に引きずられ，「作品が発表し（て）」というように言い表したの

だろう。しかし，日本語の場合では，「作品が発表され（て）」と受身形で言うのが適切であろう。

(27) は文全体がかなり分かりにくいが，中の「見える」が「見られる」のかわりとして使われたことが文脈から読み取れる。しかし，そのどちらにしても，助詞の「が」と共起することに変わりがない。「を見える」と表現されたのは，当の学生が「見える」を「見る」と思い込んだことによるからではないかと思われる。

(28) は学生の文法的知識の不足に関わる誤用である。「～が/は＋他動詞＋てある」という表現は，「自動詞＋ている」との混同がしばしばあるため，中国の教育現場で頭に叩き込まれる学習項目であるが，(28) をみると当該の学生はこれにまだ習熟していないようである。(29) は中国語的発想から生まれた誤りであろう。当文の問題箇所を中国語に言い換えると「対身体健康非常不重視……」のようになるが，中の「対」は動作の対象を表す日本語の「～に」に対応することが多く，「重視」は日本語の「重視している」にあたる。しかし，その対応関係はあくまでも中国語的発想に由来するもので，それらをそのまま日本語に当てはめることはむろんできない。日本語ではそれを「～を重視する」のように言い表さなければならない。(30) の「がもつ」の言い方は，当該の学生の論文に少なくとも三箇所発見されているので，個人的なクセによる誤りだろうと考えられる。日本語の「もつ」に対応する中国語の「拥有」あるいは「有」が完璧な他動詞であるため，「がもつ」の言い方は中国語からの負の転移によって起こったものではないといっていい。おそらく，それは，当学生が日本語の「もつ」が他動詞であることを知らないか，助詞の「が」の使い方を知らないかどちらかの要因が働いて生じた誤りであろう。

ここまでみてきたように，動詞の自他は，助詞などの問題に関係する部分があるため，中国語話者にとってうまく対処できないときがある。特に，論文執筆の際に，学生たちは中国語の発想や影響も強く受けているので，不適切な日本語の動詞表現を産出しやすくなる。

4.2. 態に関わるもの

使役態，受動態などの態は，その構成自体は中国の学生にとって理解しやすいが，動詞の自他や助詞などが絡んでいるため，少し複雑な一面がある。また，態に関する使い方は，本来なら，そのほとんどが新日本語能力試験N1[3)]に合格している四年次学生にとって，理解がさほど難しい学習項目ではないように思われ

る。しかし，卒論になると，論文作成時の注意力が散漫になるため，かなり単純な間違いを引き起こしてしまうことが多い。以下に例をあげながら検討する。

まず，自動詞の使役態に関わるケースを見よう。

(31) 表２見ると，割合が一番高いのは「丈夫」ということがはっきりさせる。（A１）

(32) 彼の目から見れば，「美」は人々に狂わせ，心から命をささげさせるものである。（A２）

(33) しかし，中国の2008年の８級の５・12汶川地震の死傷八万名に比べれば，日本人は世界に驚かせた。（A 11）

「～（被使役者）に～せる」という日本語の普通の使役表現の形式は，中国語に対応するところがあって，中国語話者にとって特に難解なものではない。しかし，自動詞の使役態はときに他動詞の機能をもつ，つまり「～（被使役者）を～自動詞＋せる」の形式をとるということは，教育指導が徹底されていないためか，あまり知らない学生が多い。その結果，学生たちは，自動詞の使役文でも，(32) と (33) の「～（被使役者）に～自動詞＋せる」，または (31) の「～が～自動詞＋せる」というような形式をとってしまうことになる（ただし，(31) においては「はっきりする」という自動詞の表現が自然であろう）。

次に，自他動詞などの混同が絡んでいる態の問題表現をみよう。

(34) 中日同形異義語の概念について，各学者が実際に使われているものは必ず一致しているとは言えない。（A１）

(35) 漢字が日本に輸入した後，国の状況により，本来と違った意味に変えられたことがある。（A 16）

(36) 『点と線』に事件が起こられた自然環境であろうと，社会背景であろうと，両方とも現実からの反映だといってもいいぐらい。（A 17）

(34) における「～使われる」は，敬語表現のようにみえるが，当該論文のほかのところに学者の名前が出てきても，それに一切敬語がついていないことからみれば，敬語表現ではないようにも思える。一つの可能性として，当学生は，「各学者によって実際に使われている」という受身の意味を表そうとしたが，それをうまくつかめず，(34) のような言い方をしたのであろう。(35) は学生が「輸入する」が他動詞であることを知らないために起こった誤りである。(36) の誤用は学生が自動詞，受身表現などを区分できずに発生したものであろう。

このように，論文で言いたいことを表現しようとしたときにそれをうまくコントロールできないと，学生たちは，上記のようにときにやや不可解な誤用を犯し

てしまうのである。

5．おわりに

日本語を専攻している中国の大学生にとって，卒業論文の完成というものは，それまで3年半にわたる学習成果の総決算に位置づけられている。従って，ほとんどの学生は，身につけている日本語力，研究力，知識教養などを徹底的に生かし，その最後の試練に取り組んでいる。しかし，日本語教育現場での指導の不足に加え，書き言葉と話し言葉の区別を知らないことや，日本語能力の差があることで，本稿で取り上げた諸問題が次々に現れてきたのである。

A大学に限ってみても問題がこれだけ多くあるので，同レベルのほかの大学にも，同じような問題点があってもおかしくないと考えられる。その中からさらに何か共通するところが発見できれば，中国の大学生による日本語卒業論文のコーパスの構築や，教育現場での指導のあり方の再検討などに役立つだろう。将来的にそういった方向で，同じ問題意識をもつ他大学の有識者と協力しながら，より充実した研究ができるように努力したい。

注

1）教員の指導方法と卒業論文の問題点との関連性については別稿で検討する。

2）「作品发表」というのは，形式からみれば「发表」が自動詞であるようにみえるが，「作品被发表」という受身表現的な響きも感じ取られる。しかし，「作品被发表」の言い方はかなり特別な場面以外にめったに耳にしない。よって，本稿では「发表」の自他の区別の判断が下しにくいとした。

3）新日本語能力試験は，日本国際教育支援協会と国際交流基金が主催の，日本語を母語としない人を対象に日本語能力を認定する検定試験である。N 1がその最上級のレベルにあたる。

参考文献

池尾スミ（1987）『教師用日本語教育ハンドブック①文章表現』，国際交流基金

泉原省二（2007）『日本語類義表現使い分け辞典』，東京：研究社

奥秋義信（1993）『日本語の文章術』，東京：創拓社

北原保雄（2004）『問題な日本語』，東京：大修館書店

グループ・ジャマシイ（編著），徐一平ほか（訳）（2001）『中文版日本語文型辞典』，東京：くろしお出版

齋藤シゲミ（2005）「中級の日本語学習者の作文における「だから」の指導―「だから」の際立たせの機能―」『北海道文教大学論集』第6号，北海道文教大学，137-148

三枝令子（2002）「書き言葉における「だろうか」「のだろうか」の使い分け」『言語文化』39，一橋大学語学研究室，21-37
鈴木忍（1978）『教師用日本語教育ハンドブック③文法Ⅰ』，国際交流基金
田中信之（2005）「推敲に関する講義が推敲結果に及ぼす効果」『日本語教育』124号，日本語教育学会，53-62
二通信子・佐藤不二子（2003）『改定版　留学生のための論理的な文章の書き方』，東京：スリーエーネットワーク
浜田麻里・平尾得子・由井紀久子（1997）『大学生と留学生のための論文ワークブック』，東京：くろしお出版
森田良行（1988）『日本語の類義表現』，東京：創拓社
戈登・哈维（著），沈文钦・李茵（訳）（2007）『学会引用—大学生论文写作指导手册—』，北京：教育科学出版社
李晨媚（2012）「日语写作教学探析」『长春教育学院学报』第6期，『长春教育学院学报』編集部，101-102
熊燕（2010）「大学生日语作文中存在的问题及其对策」『浙江万里学院学报』第1期，『浙江万里学院学报』編集部，89-92
于康（2008）『日语论文写作—方法与实践—』，北京：高等教育出版社
于日平，黄文明（2004）『日语疑难问题解析』，北京：外语教学与研究出版社
赵福泉（1988）『日语语法疑难辨析』，上海：上海外语教育出版社

謝辞

本稿の作成にあたり，深圳大学日本人教員の奥川櫻豊彦氏から多大な協力をいただいた。また，査読者からもたいへん貴重なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。なお，本稿は，中国教育部「留学帰国人員科研起動基金」（課題番号：[2008] 890号）の助成を受けている。

（WANG Gang，深圳大学外国語学院副教授）